

「役割づくりと居場所づくりってなんやろ？」 ケアするローカル研究所 in くるめ DAY3 開催レポート

季節が冬へと移り変わり、寒い日々の続く時期となりました。JR久留米駅の近くにあるヘアサロン「余韻」をお借りして、12月8日（月）に「ケアするローカル研究所 in くるめ」のDAY3が開催されました。続々と会場にたどり着く参加者さんで、会場いっぱいに並んだ椅子が会の開始時点でなんと満席に。後から来られた参加者さんも座れるように、すでに来られた参加者さん同士で、椅子を動かし空間をつくって座れる場所を用意する様子は、なんだかケアに溢れていました。



会がスタートする頃には、詰め詰めなほどに満席！！すごい！

これまでの2回を振り返りながら

「ケアするローカル研究所」は、久留米市の地域福祉課による事業の1つで、参加者のみなさんがローカル（地域）のなかで「ケアってなんだろう？」を探究しながら、それぞれの小さなアクションやはじめの一步を踏み出すきっかけの場としてスタートした計5回の企画・旅です。

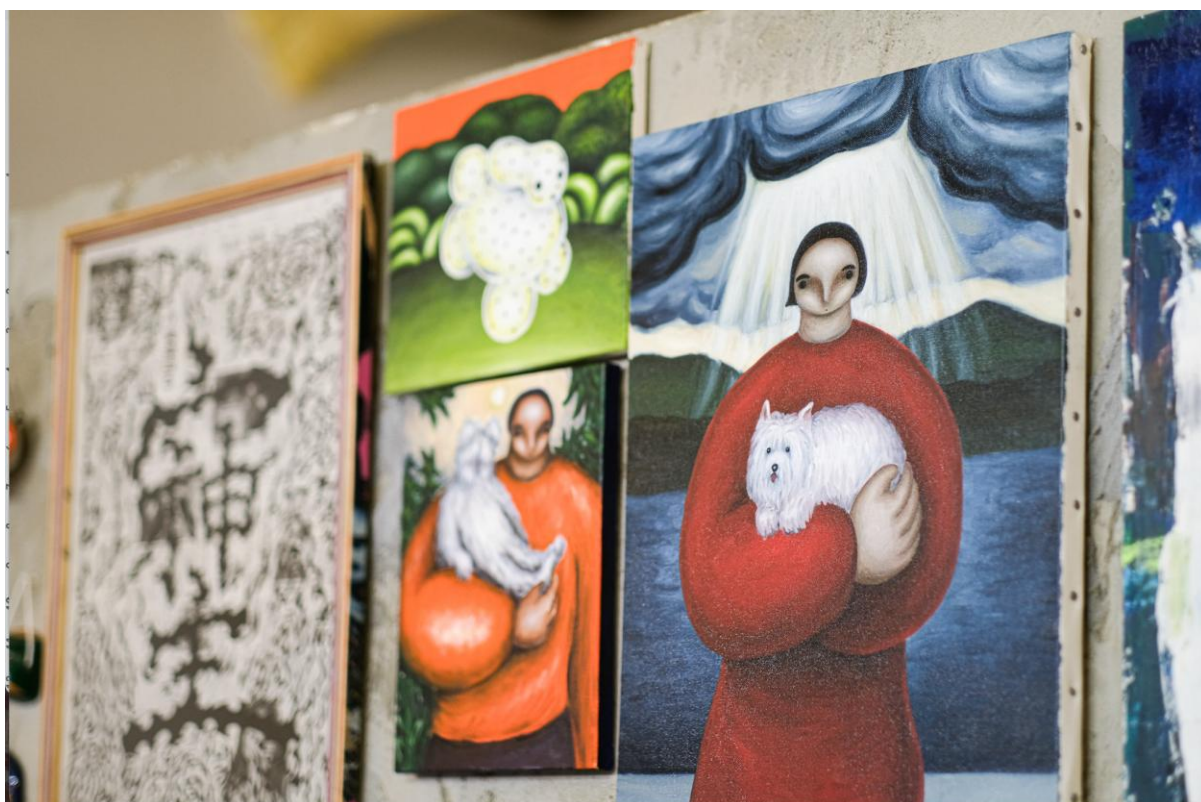
Day1では「株式会社ここにある」代表取締役の藤本遼さんより話題提供をいただきながら「ケアってなんやろ？」「地域福祉ってなんやろ？」を考え、専門家でない地域住民としてどうケアに関われるかを探求する時間となりました。Day2では、久留米市寺町にある「真宗大谷派 清涼山 真教寺」というお寺の一角をお借りして、久留米市で地域福祉をテーマに活動されている3名のゲストの方からふだんの活動の紹介や実践のなかで生み出されるケアのお話を伺いました。会の後半では、より具体的に参加者さんの小さなアクションのきっかけの場として「まちにひそむケアをさがすPJ（プロジェクトの略）」

「ボランティアフェスティバルアップデートPJ」「AU-formalフクフェスPJ」「ナンバーソンカードPJ」「かんちゃんと一緒に！PJ（「食×ケアの探求」かんちゃんたこやきチーム（仮））」の5つの活動が誕生し、それぞれ動きはじめたのでした。

そして、今回はDay3ということで旅の折り返し地点。宮崎県三股町から、ゲストの松崎亮さん（COMMUNITY DESIGN LAB. 所長／宮崎県三股町社会福祉協議会）にお越しいただき、「役割づくりと居場所づくりってなんやろ？」をテーマにこれまでの取り組みや、現場や社会で起きていることの構造について話題提供いただきました。レクチャーの内容と参加者のみなさんとの対話の様子をこのあと詳しく書いていきます。

今回の会場は、ただの美容室ではない？

今回お借りした会場は「余韻」というギャラリーを併設したヘアサロン。会の当日には、パネルにさまざまな絵画が飾られ、またアート雑貨の展示も行われていました。どこか心が落ち着くような空間が演出されていました。スタッフの野田さんもDay2とDay3に参加してくださいました。



素敵なアートが多く展示されていました。参加者さんの中には「余韻」でヘアセットされる方もいらっしゃるようです。

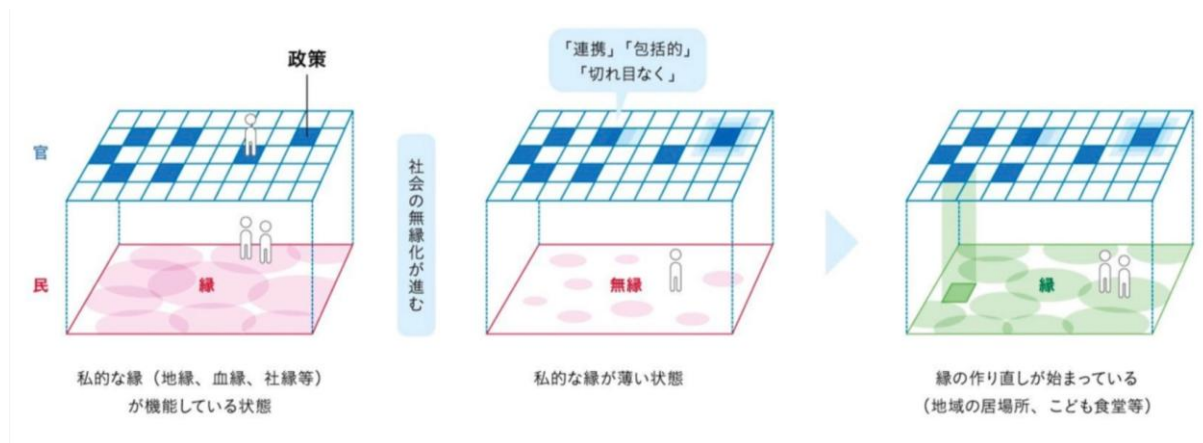
”福祉”のおしつけでなく、”福祉”を暮らしにどう潜ませるか

場が温まったところで、ゲストの松崎さんから話題提供がはじまりました。聞き手には「株式会社ここにある」の代表取締役である藤本遼さんと「株式会社つくるのわデザイン」の岩本諭さん。今回も参加者さんが話を聞きながら質問や感想を書けるようにSlido（スライドゥ）というアプリも並行して使用しながら進めていきました。自称「日本一スライドの枚数が多い社協職員」とのことので、今回も630枚のスライドを用意されているとのことだったので（かなり多い！笑）、前置きは短めでスタートしました。



ゲストの松崎亮（まつざき・あきら）さん。雰囲気ですでに社会福祉協議会の職員ではなかったような。

かれこれ20年ほど、社会福祉協議会（以後：社協）の職員として地域福祉に関わってこられた松崎さん。この日は、そんな松崎さんが考える「福祉のポジショニング」のお話からはじまりました。高度成長期直後のまだ私的な縁（地縁、血縁、社縁など）が機能していた頃は、困っている人が「困っている」と言える場が身近にあり、福祉的な課題を持つ当事者は、それらの縁に支えられつつ行政等の窓口に通じ着けるような状況があったそうです。ゆえに、社協はその困りごとを拾い上げて政策や制度につなげていく、という動きをしていたそうです（下図の左）。一方で、時代の移り変わりと共に、社会の無縁化が進んで、地域の困りごとをうまく拾えなくなってくると、政策や自治体レベルでは「連携」「包括的」「切れ目なく」に重点を置いて、その網目を広げていこうとしました（下図の真ん中）。それでも拾いきれない困りごとをどう拾っていくかという問いが生まれている現代では、たとえば、駄菓子屋やこども食堂、暮らしの保健室など、地域の居場所づくりによる「縁のつくり直し」からはじめていく必要がある（下図の右）、と松崎さんは言います。



松崎さんのお話やスライドの中で、時々こうした「一般化した図式」が登場するのですがこれがとにかく分かりやすいんです！

この「縁の作り直し」につながる活動として、宮崎県三股町の社協のなかに設置された「COMMUNITY DESIGN LAB.（以後：コミュラボ）」の紹介がありました。コミュラボは、住民主体の活動を通して、地域課題を解決するという取り組みです。現在、三股町では住民主体の活動が200個ほど存在しているとのことで、その一部を紹介していただきました。

COMMUNITY DESIGN LAB.の詳細はこちら

[ABOUT | 三股町コミュニティデザインラボ](#)

例えば、シニア世代の方が営んでいるカフェ様式のコメイキングスペース「co-me」は、使い方も過ごし方も限定せず、幅広い世代の人に来てもらうことで、交流や様々なコラボレーションが起きている場だそうです。ここを起点に日本語教室の開催や日本語教師コミュニティが誕生したり、傾聴ボランティアによる相談会が開催されたり、音楽会が生まれたり、という活動に展開しているようです。そのほかにも、三股町に移住してきた若者のアイデアから生まれた古着屋「NAZO」では、おじいちゃんおばあちゃん世代に古着を着てもらってモデルをしてもらっていたり、「みまたん宅食どうぞ便」という18歳以下の子どもがいる一部の家庭に定期的に無料で食材（世帯の10食分）をお届けするサービスがあったり、その活動領域は無限大です。この日もスライドで数多くの活動が紹介されていたのですが、どの写真でも住民の方の笑顔がキラキラしていて、世代を超えた交流が自然とされていました。

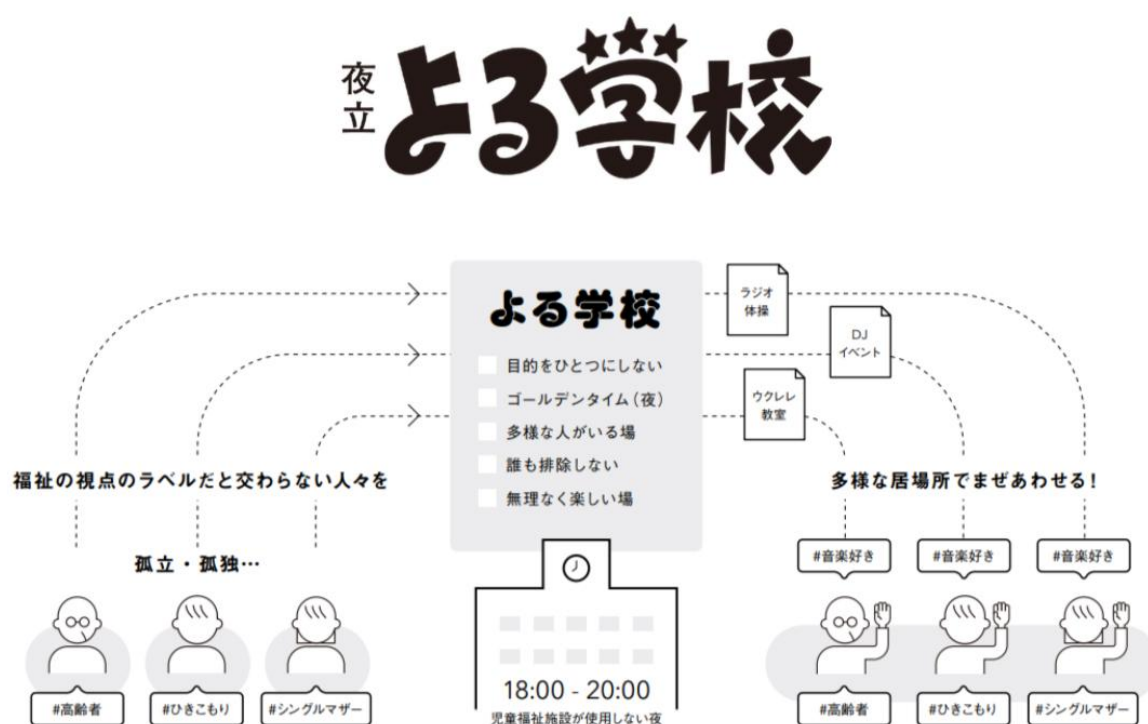
こうした数多くの活動を見てきた松崎さんが気づいたのは「”福祉”のおしつけではなく、”福祉”を暮らしにどう潜ませるかが大事だ」ということでした。「個別支援」を中心とした福祉的な支援や活動だけではなく、それぞれの生活者の「興味関心」をベースとしてつながりが広がっていくまちづくりも非常に重要である、ということ。松崎さん自身も実践していく中で、人の暮らし（人やリソースが集まりやすい場）は「興味関心」の領域に寄っているということがわかってきたそうです。

「支援」を入り口としてではなく、本人の「気になる」を入り口とした場づくり

どうして松崎さんは「日常に福祉を潜ませる」ようになったのでしょうか？

「個別支援」からスタートした松崎さんの取り組みの1つに「不登校の子どもの居場所づくり」という取り組みがありました。事前の調べでも、三股町には一定数の不登校になっている子どもがいたとの結果がありました。しかし当時、不登校の子を対象とした取り組みを展開してみても、一切届いていないということに直面したそうです。そんな折に地域のお祭りに参加してみると、不登校の子も含めて多様な住民がそこに集まっていたことに気づきました。松崎さんが考え、至った結論は「お祭りには、沢山のタグ（個々人の興味関心）が紐づいていた」ということでした。

子どもも高齢の方も、アメリカンドッグが好きな人、金魚すくいが好きな人、友達がいるから行くという人も、なんとなく気軽に行く人など、対象や目的を絞っていないからこそ誰でも参加することができるのだという点に気づいたそうです。「いろんなタグが集まっていることが、地域の間においては大事であって、支援目的の場だけではそれは難しい」「支援ではなく、本人の気になるが関わりのかっけになっていく」と松崎さんは語ります。その気づきから、不登校の児童が参加しやすいイベントとして生まれたのが「よる学校」でした。



それぞれの「気になる」「好き」をきっかけに来てくれて、交わる。それが「よる学校」です。

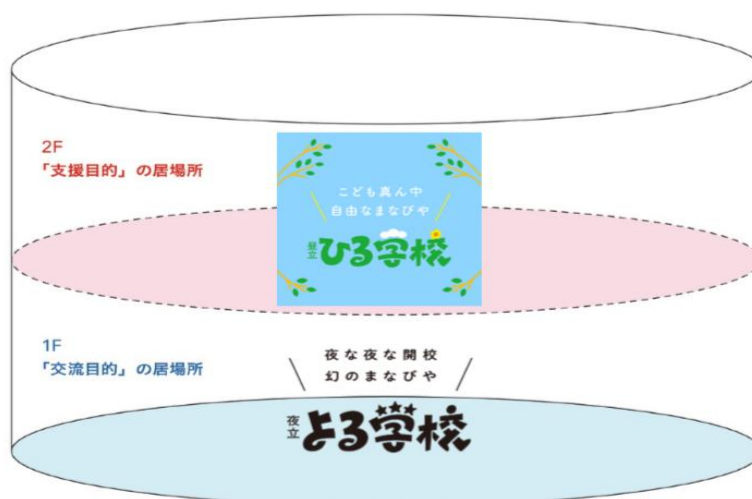
「よる学校」は、日中は学校や職場にいて多様な人と混ざり合いづらいけれど、夜なら「昼間のタグ（所属や役割等）」が外れた自由な混ざり合いも可能では？というアイデアから生まれた企画でした。さまざまなタグを通して、ふだんは生まれにくいような多様なつながりや場ができていきました。



「自衛隊と隠れ隊！！」イベントの様子

「一般的な地域づくりはこれでいいと思いますが、交流が生まれるだけで福祉的な意味はなにかあるのか？とよく聞かれるんですが」と話すのは松崎さん。そこで例に挙げたのが、「ひる学校」というフリースクール。よる学校で出会った保護者や団体の方がはじめた取り組みなんだそう。よる学校に参加したことで、三股町に不登校の子が多くいること、そしてその親御さんが仕事に行けなくなっている事実を知った大人たちが、自分たちで分担して「ひる学校」をつくるのはどうか、と住民主体で発生したのだそう。

ここで、松崎さんがこの構造を一般化できるよう図式化して説明してくださいました（下図）。



地域は「交流目的」の居場所をベースとした2階建て構造になっており、1F部分でつながりができると、そのなかで生まれたニーズの担い手が見つかり、2Fのイベントや取り組みが生まれる、という図式です。

なるほど。このように構造化して理解することで、単純に楽しいだけの場づくりをしているわけではない、ということを巧みに紹介・説明していく松崎さん。自らのアクションを個別具体だけの取り組みに留めておくのではなく、より普遍的なものに昇華していこうとするチャレンジが見て取れました。

松崎さんからの話題提供が終わったあとは、参加者のみなさんが小グループに分かれて感想共有と意見交換を実施。たくさんの情報と学びを受けて、会場では頭を整理しながら積極的にディスカッションをされている様子があちらこちらで見られました。

深掘りタイム

まず、聞き手の藤本遼さんと岩本諭さん、そして参加者さんの順に、松崎さんへ気になったことをどんどん質問していきました。

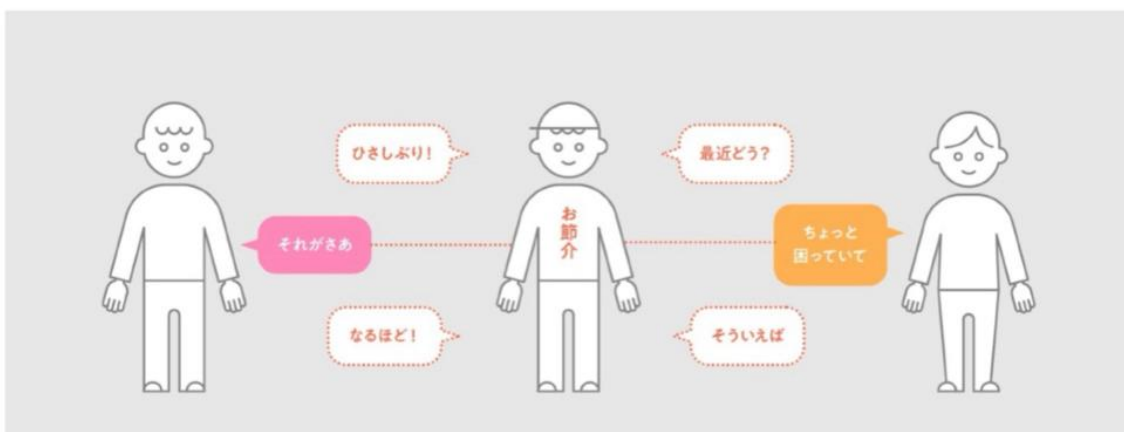
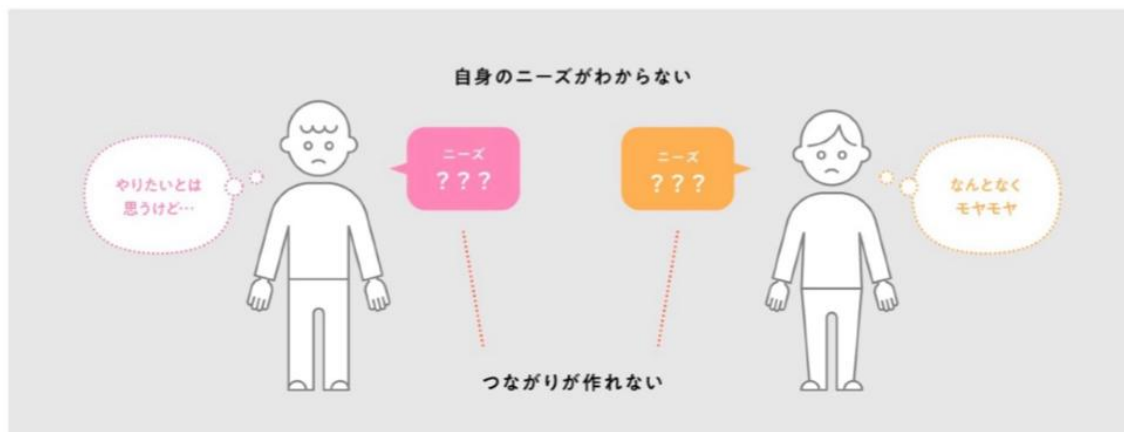


――三股町で「住民主体」の活動がこれだけ盛んに行われるようになるまで、松崎さんが具体的にどんな動きをされていたのか知りたいです。

松崎さん：

具体的には、（下図のような）「言っていないことを見立てる」ってことをやっていました。プロジェクトって例えば、「わたし、カフェ店員をやりたいです！」「このスペースでカフェをやってほしい」という2人がいてなにかが生まれるじゃないですか。でも実際の地域は必ずしもそうではないし、そんな

にうまくパズルのピースがハマることはない。なにか困っているときに、ニーズを自分から伝えられる人もいれば、自分が困っていることに気づいていない、あるいはニーズを上手く伝えられない人もいるんですね。このニーズを表出できない人たちと支援できるリソースの間をどう取り持つかが、僕ら（社協）の役目だと思っています。「言っていないことを見立てる」というのは、例えば、夏休みになると、給食がないことでご飯を食べられず、体重がかなり減ってしまう女の子がいたとしますよね。でもそれを受けて「困っている人がいるから支援してください」と直接的に言うのではなく、「みんなで楽しく食べられる場をつくろう!」と言ってプロジェクトをつくって、結果的にそういう子も食べに来れるみたいな。そんなマッチングや共感性で広げていく、みたいな動きはしていますね。



ニーズにならない思い（モヤモヤ、ヤルヤル、ワクワク）を抱えている人とつながるためには、他者がそれらを見つけて、本人がニーズを自覚する前になんらかの働きかけや関わりをする必要がある（別の言い方をすると、他者が関わることでニーズが生まれるということ）。こうしたニーズが生まれる前のプロアクティブな関わりは、地域社会では「お節介」という日常的な行為として実践されてきたものでもある。

ー1つ1つのプロジェクトや居場所づくりの資金源はどうしていますか。co-me（co-meking space）のおばあちゃんたちはボランティアなのでしょうか。

松崎さん：

co-meking spaceのカフェは民間事業なので、受益者（カフェのお客さん）からお金をもらってやっていますね。少しずつですが売上は上がっていています。過去5年間の経験からのお話にはなりますが、本当に面白いことをすれば、お金は集められるなと思っています。あとは補助金を使ったり、リソース（空き家など）を上手く使ったりして、改修費用を浮かせたりもしています。

岩本さん：

co-me (co-making space) の初期費用とかはどうしてましたか？

松崎さん：

こどもの未来応援基金というのがあって、採択されたのでそのお金を使いました。あとは、このプロジェクトを楽しみにしてくれていた社会福祉法人さんが放課後等デイサービス（障害のある小学校・中学校・高校の学生を対象とした、放課後や長期休暇中に、必要な支援を提供する福祉サービス）を提供されていたので、「ワクワクを広げるために、おばあちゃんたちとこんなプロジェクトをしたら面白くないですか？」と声をかけてくれたら資金的にも協力いただけたらいいな。そういった感じでした。

ー松崎さんの話題提供のなかで出てきた「タグ」に関してです。大人数のなかでそれぞれの人の「気になる」「好き」などのタグを見つけることや、タグを持っている人同士をマッチングさせることが得意なコーディネーターはどうやって出会えるのでしょうか？

松崎さん：

「タグとタグのたすきがけをやろう」という視点で社協の職員みんなですべて町の人を見続けているって感じですかね。「出番」ができるだけでその人はケアされるんですよね。だから「この人の出番を探すぞ」って気持ちで町を見ているような、そんな感じですね。

藤本さん：

コーディネータースキルを持った人材の育成はどうしていますか？

松崎さん：

僕は研修がそもそも苦手で、そういうことはやっていないです。どちらかといえば「その人がそれ（町の人同士のタグをつなぐこと）を好きか、ちゃんと主体性を持って考えて関わられる人か」を見ているですね。地域住民の方がコーディネーターをやっている場合には、興味があってやっているはずなのでわかりやすいんですが、社協の職員は「役割として」コーディネーターを引き受けている場合もあるので、興味や主体性の有無を見分けるのは重要だなと思っています。

ープロジェクトや企画を立ち上げる時に「こういうのはやめておいた方がいい」というものはありますか？

松崎さん：

あんまりないんですが、誰かを傷つけたり攻撃したりするものはやめた方がいいとは思っていますね。

ーよる学校などの取り組みや企画が町の住民さんに広がり浸透していくまでにどれくらい時間がかかったのでしょうか？広め方も気になります。

松崎さん：

広めるための一番のコツは「続けること」だと思っています。続ければ徐々に（住民さんに）出会っていきなりするので。時には経済的に続けていけなくなる時もあるんですが。もう一つ大事だと思っ

ていることは、「いかに自分たちがその取り組みを面白がれるか」だと思っています。例えば、参加者が3人しか来ていないときに「事業失敗！」と思わずに、「3人で楽しむ」と思えるか。いかに内輪のノリを続けていけるか、続けるためにいかに自分たちが楽しむか、が大事だと思っています。



質問の合間にも、会場内は笑い声や驚く声、うなずく様子などが見られました。

一一社協の職員として成果を求められることもあると思いますが、どんな結果につながるかわからないプロジェクトを進めていく上でどう対応していますか？

松崎さん：

成果をはかる尺度の側が合っていないと思うことが多いですね。「居場所の数が大事」とか言われますが、居場所の数＝本当に必要な支援が行われている数ではないんですよ。ロジックだけで考えて行動していたら、向こうの土俵に乗ってその成果の考え方に流されちゃうんですけど、でも「自分は誰よりもこのことを考えて行動している」と自負を持ってストーリーを考えたら、制度なんていくらでもちゃんと説明できちゃうな、と思っています。現場を一番見ているのは社協なんですから。現場で起きていることを言語化する努力をしたら、全然。むしろ、制度を活用しちゃうくらいですね。

岩本さん：

松崎さんの図式化がとてもわかりやすいな、と思ってスライドも見ていました。

松崎さん：

「このイベント、楽しそうな人が集まってるけど、結局これはなにが起きているの？」と説明を求められたときに、最後、概念と構造を説明できないと相手に理解してもらえないな、という実感がありますね。だからそこを頑張っていますね。

岩本さん：
どう頑張ったらいいでしょうか。

松崎さん：
うーん、できるだけ「一般化する」ことがまず大事。1つの事例だけだと上手く掴めないと思うので、3つくらい事例を束ねると「こういうことだったか」と一般化できる気がします。

ーデザインやロゴの効果ってどんなものですか？

松崎さん：
社協の職員として、デザインやロゴを作成をしていないと、これまでのイベントの多くは町の人に届いていないと思うし、今日僕はここに来ていないと思っています。「見える」ってまず最初に生じる「交流の入り口」なんだと思うんです。そういう意味でいうと、ロゴ1つ1つに意味があるというよりも、地域の営みを「どう見せるか（を考えること）」に意味があると思っています、その手法としてロゴやデザインが僕たちに合ったもの、と思っています。

藤本さん：
なるほど。伝え手側のロジックだけではなくて、受け手がそれを見てどう感じるかが大事だと。「面白そう！」「関わってみたい！」と思えるか、出し方がめっちゃ大切ということですね。

松崎さん：
そうそう。暮らしている側の人はどう見るか、ですね。福祉って「その人たちのためにある」ってよく言われるから、暮らしに一見近いように思えるけれど、相談窓口がわかりづらかったりする。制度や窓口をつくって終わりではなく、そこから先もうまくデザインしないと、困っている人がたどり着けない仕組みになっているよね、と思います。

ーこの役割（役者）が揃ったら、プロジェクト始動に移れるというものはありますか？

松崎さん：
主体性と他者への興味を持ったコーディネーターと、グラフィックデザインができるデザイナーがいたら、どの地域でも同じ動きはできると思いますね。

岩本さん：
え？プレイヤーはそこにいなくていいんですか？

松崎さん：
実はプレイヤーはどこの町にもいますから。見立ての問題です。そのプレイヤーに出番をこしらえるのが上手なコーディネーターとデザイナーがいればいいと思います。

藤本さん：
社協の中だけでなく、町のなかにもそういったコーディネーターやデザイナーを増やしていこう、という動きもされていたりするんですか？

まさに「よる学校」は地域住民が主体となってやっていたイベントで、コーディネートをどうするかを頑張った事業でしたね。あとは、この「お節介百人一首会議」では、住民さんと地域にあるワクワク・もやもや・やるやるを掛け合わせて、面白い取り組みを生み出せないかなというのを競うイベントなんですけど、これでコーディネーターセンスがいい人はこれから一緒にやっていきたいな、みたい。そんなコーディネーターを発見するイベントにもなっています（笑）。あとは、時々コンビニで、オリジナルティを発揮したチラシが貼られているのを見かけることがありますよね。そういったコンビニにも面白いコーディネーターがいるのかな、とかは思っています。

松崎さんのお話に、参加者さんの質問も多く寄せられ、時間はあっという間に過ぎていきました。

前回Day2で、5つの活動「まちにひそむケアをさがすPJ」「ボランティアフェスアップデートPJ」「AU-formalフクフェスPJ」「ナンバーソンカードPJ」「かんちゃんと一緒に！PJ（「食×ケアの探求」かんちゃんたこやきチーム（仮））」が誕生しました。前回から今回にかけて、各プロジェクトごとにどんな進捗が合ったかを残りの時間で共有しました。

オンラインでのミーティングをすでに1回は実施しているところがあったり、披露する場（フェスなど）が近日中にあり、それに向かって準備していたり、子ども食堂などに見学を検討しているところがあったり、と、プロジェクトが動いている様子がそれぞれのグループで見られました。一番印象に残ったのは、「ナンバーソンカードPJ」と「かんちゃんと一緒に！PJ」がボランティアフェスティバルで出店を検討しているというお話があったことです。それぞれのプロジェクトがバラバラに動くのではなく、コラボという形で交わることがとても素敵だなと感じました。今後の動きもまた楽しみです！



まちにひそむケアをさがすPJの近況を報告してくださっています。

さて、次回Day4では、コミュニティナースをお迎えして、さらにケアや福祉について考えていきます。今回のお話とつながる内容もあるかもしれません。今からとっても楽しみです！

▼ケアするローカル研究所 in くるめ 市サイト

[久留米市：ケアするローカル研究所](#)